

6 仏教漢文講読：『維摩経』をよむ

【全8回】／開催方法：現地

やまぐちひろえ
山口弘江

駒澤大学仏教学部准教授



受講料 会員料金：¥17,000 早割価格：¥16,000(納入期限：5月16日)

【日程】【全8回】 1回／月 第3日曜日 ※最終日のみ第2日曜日
(5/21、6/18、9/17、10/8)

【時間】13：20～14：50・15：00～16：30

■受講に必要なもの

【テキスト】レジュメ配布

『維摩経』は、漢訳では3巻と短い内容ながらも、東アジアの仏教思想および文化に大きな影響を与えた代表的な大乘経典の一つとされます。『法華経』などのように特定の宗派の聖典とされることはありませんでしたが、だからこそ『維摩経』は信仰や教義の垣根を超えて、多くの人々に愛読されました。また、近代以降は東アジアだけでなく、世界中の仏教学者が『維摩経』に着目し研究を行ったことで、欧米語なども含め、数多くの現代語訳が刊行されるに至っています。1999年には、これまで残っていないとされていたインド古典語のサンスクリット語によるテキストが日本の大正大学の調査隊によってチベットのポタラ宮で発見されました。この大発見によって、『維摩経』の研究は近年さらなる進展を遂げています。

お経の主人公は、仏ではなく維摩詰という大富豪です。在家菩薩として一目置かれる存在の維摩詰が、ある時、病気となります。その知らせを受け、仏は弟子を見舞いに遣わそうとするのですが、ここから物語は大きく展開していきます。全14章の中には、読者を惹きつけてやまない名場面が随所に設けられています。深淵な教理を巧みな譬喩で表現するレトリック、維摩詰が仏の十大弟子をはじめ、弥勒や文殊といった大菩薩をやりこめる見せ場、方丈という小さな病室に無限の空間を見せる演出など、さまざまな手法をこらして大乘経典の醍醐味を我々に示しているのです。

本講義では、『維摩経』の諸訳の中で最も広く読まれた鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』をテキストに、本文を講読します。2018年度には「仏国品第一」、2019年度には「方便品第二」「弟子品第三」、2020年度には「菩薩品第四」、2022年度には「問疾品第五」「不思議品第六」を講読しました。それらの内容をふまえつつ、今年度は「観衆生品第七」から最終章にあたる「囑累品第十四」までを受講者の皆さんとともに輪読する予定です。受講を通じて、みなさんが『維摩経』の世界を原典に基づきみずから味わい、仏教漢文の基礎を身に付けることを目的としています。

*2018年度から継続している講義ですが、今年度からはじめて受講される場合でも理解できるよう説明しますので、新規の方もご心配なくお申し込みください。

*受講にあたって特別な予習は必要ありませんので、これまであまり仏典に触れたことがない方や、歴史や漢文・漢字に興味のある中高生の受講も歓迎します。

*当日は講読がメインとなりますので、漢和辞典を持参してください。新たに購入する場合は、『全訳 漢辞海』第四版（三省堂、2016年）を推奨します。

【参考書】

①現代語訳大乘仏典3 『維摩経』『勝鬘経』 著者：中村元 出版社：東京書籍 出版年：2003

②梵文和訳維摩経 著者：高橋尚夫、西野翠（訳） 出版社：春秋社 出版年：2011